撐水底令船進者、亦呼加伊、其用與檣同、蓋櫂之一轉者也、

〔類聚名義抄三舟〕舵カイ　〔同三木〕櫂正直狹反、サチ、サチキ、　棹通、サチ、カイ、

〔干祿字書去聲〕棹、櫂上通下正

〔伊呂波字類抄加雜物〕棹カイ舟棹　榜　櫂已上同

〔運歩色葉集賀〕楫カイ船　櫂同

〔易林本節用集加器財〕櫂カイ舟具

〔和漢船用集十一用具〕櫂　字彙曰、進船檝、在傍撥水、短曰檝、長曰櫂、韻會曰、前推曰槳、後曳曰櫂、縱曰櫓、横曰槳、是にて別べし、前へ押す槳は打かい也、後へ曳く櫂はかい也、縱に押す者は櫓也、横に押す者は打かい也、〔略〕中武備志に、其尾無櫓、其傍無槳といへり、玄かれば舳に立大なるを櫓と云、左右の傍に立を槳と云、則わきろと讀せり、軍書等に脇櫓脇梶と云も櫓なり、ろ、かい、さほ、かぢ、四名一物にして、大小長短の品に依て、文字の差別あるべし、ろと云、かいと云、さほと云、かぢと云べき者、櫂、棹、艣、檝、楫、橈、柮、棧、槳、艣、榜、篙、檣、般等の字也、いづれも、ろ、かい、さほ、かぢと云讀はあれども、今云、ろにも、かぢにもあらず、万葉拾穗、季吟曰、此集かいをかぢとよむ歌おほし、上古は假名づかい、さして定らざる故也といへり、万葉に、檝をかいとよめるを、和名抄に加遲とす、万葉にかぎらず、古にはかいをかぢと云しと見へたり、〔略〕中万葉に、八十梶かけと讀るは、八拾丁立なり、漢に八十棹と見へたり、是棹櫓なるべし、和名抄、舵をたいしと云にて見るべし、今是をかぢと云、船一艘に、たゞ一ツ有者なり、〔略〕中古事記、万葉等、楫、橈、梶と書、爲柁字謬乎といへり、又書にのするといへども、誤る者ずくなからず、續日本紀、文德實錄、梼をかぢと訓ず、和玉篇に舵をさほと訓し、舵をかぢと讀せり、甚敷者は、下學集、節用等、械の字を書、船具とす、械はあしかせなり、音かいと云故に誤る者か、則船械と云は、船底に穴を明、首かせとする也、五車韻瑞に見へたり、駱賓王集に、輕舸米蘭橈楊泉五湖